

テーマづけの一つのケース

田 中 実

1. テーマづけ (thematization) には種々の方法が見られるが、その一つに疑似分裂文 (pseudo-cleft sentence) によるものがある。次の二組の文は、それぞれ、「時間」と「場所」を表す語句に導かれて、文頭でテーマづけが行われた構文である。

- (1) a. *When* I saw John was at five o'clock. —Emonds, 1972.
b. *The time* he came was a couple of weeks ago. —Bolinger, 1972.
c. *The last time* I saw my father was in Grand Central Station. —J. Cheever, "Reunion"
- (2) a. *Where* I saw John was in Boston. —Emonds, 1972.
b. *The place* he lives is right down the street. —Bolinger, 1972.
c. *The last place* I lived was with an old man. —T. Capote, "Miriam"

(1a, b) (2a, b) は、それぞれ、通例の疑似分裂文であるが、(1c), (2c) は、それぞれ、文頭の要素に modifier (この場合, *last*) の付加が見られることから、やや特異な、有標の (marked) 形式である。事実、後者からは、前者のように、文頭の要素と be 動詞とを削除しても平行的な意味を有する構文は生じない。

- (3) a. I saw John at five o'clock.
b. He came a couple of weeks ago.
c. I saw my father in Grand Central Station.
- (4) a. I saw John in Boston.
b. He lives right down the street.
c. I lived with an old man.

(3c), (4c) が, それぞれ, (1c), (2c) とは意味的な平行性を有しないことは明らかであろう。

では, そうした (1c), (2c) のような構文の実体は何なのか。本論では, 従来あまり取り上げられることのなかった, (1c), (2c) に見られるようなテーマづけが行われた構文について, 統語的, 意味的および機能的観点から若干の考察を行うことにする。

2. まず, (1a~c), (2a~c) の統語的特徴を見てみよう。(1a~c), (2a~c) がすべて, Bolinger (1972) の言う等式文 (equational sentence) であることは, テーマ (theme) の部分と焦点 (focus) の部分との reversion が可能であることから指摘されよう。

- (5) a. At five o'clock was *when* I saw John.
- b. A couple of weeks ago was *the time* he came.
- c. In Grand Central Station was *the last time* I saw my father.
- (6) a. In Boston was *where* I saw John.
- b. Right down the street is *the place* he lives.
- c. With an old man was *the last place* I lived.

ところで, Bolinger (1972) には, 次のような指摘も見られる。

- (7) a. It was yesterday that he came.
- b. It was yesterday when he came.
- (8) a. When I'm going is now.
- b. It's now that I'm going.
- c. *It's now when I'm going.

(7b) と (8c) とでは, 容認可能性に相違が見られる。その場合, われわれの (7b) のような文に対する解釈の仕方を Akmajian (1970) 流にパラフレーズすれば, (9b) であって (9a) ではない。

- (9) a. Yesterday was the time that he came.

- b. Yesterday was in progress when he came.

すなわち、(7b) では、(9a) のような等式文としての解釈がなされるのではなく、(9b) のように、「昨日という時が彼の来訪時に進行中であった」という解釈がなされるのである。したがって、(7b) は、(10a～c) とは構造を一にする。

- (10) a. It was dark when came.
 b. It was raining when he came.
 c. It was a nice day when he came.

それはさておき、Bolinger (1972) によれば、(7a, b) は、それぞれ、(11a, b) から派生されるとする。

- (11) a. When he came was yesterday.
 b. When he came it was yesterday.

すなわち、等式文である (11a) から 分裂文化 (cleaving) を受けたのが (7a) であり、等式文ではない (11b) から 普通に倒置 (inversion) を受けたのが (7b) である。

この (11a, b) を見てみると、(11b) は形式的には (11a) のテーマの部分 が 左方転位 (left dislocation) されたものであると言える。もしそうした見方が成立するならば、等式文である (1a～c), (2a～c) のテーマの部分にも、それぞれ、左方転位を施すことが可能なはずである。

- (12) a. *When I saw John, it was at five o'clock.*
 b. ??*The time he came, it was a couple of weeks ago.*
 c. **The last time I saw my father, it was in Grand Central Station.*
 (13) a. ??*Where I saw John, it was in Boston.*
 (cf. *Where I live it's a desert.* —Bolinger, 1972.)
 b. ??*The place he lives, it is right down the street.*
 c. **The last place I lived, it was with an old man.*

しかし、結果は上の通りである。すなわち、(12a) は、(11b) と同様、全く容認

可能であるが、他方、(12b) は、米人のインフォーマントによれば、uneducated colloquial speech においてなら可能かもしれないが、通例、容認されない。また、(12c) は全く容認不可能である。さらに、(13a~c) も、通例、容認されない。

では、なぜ、(12a) のみが容認可能なのであろうか。それは、左方転位された *when*-S が接続詞 *when* によって導かれる副詞節で、統語的（および意味的）に自立しうるからであると思われる。（その場合、主節の *it* は時間の *it* として、換言すれば、外界照応 (exophoric) の *it* として機能する。）

以上のことから、(1a~c), (2a~c) はすべて、統語的に見た場合、テーマの部分と焦点の部分との reversion が可能な等式文であるが、テーマの部分の左方転位が可能なのは (1a) の場合のみであって、本論で問題とする (1c), (2c) の場合は全く不可能であると言えよう。

3. ところで、Bolinger (1972) が等式文であると言う場合、それは統語上は言うまでもなく、意味的にも等式化されているということである。例えば、次のような例を見てみよう。

- (14a). *The time at which John began coughing was in the middle of the concert.
 - b. The time at which John began coughing was the very middle of the concert.
 - c. The time when John began coughing was in the middle of the concert.
- 以上, Bolinger, 1972.

いま、be 動詞の部分を // で表せば、(14a~c) では、それぞれ、意味的には [+time] // [+time] という形で等式化されている。しかしながら、統語的には、(14a) は nominal // adverbial, (14b) は nominal // nominal, (14c) は adverbial // adverbial という形で、(14a) のみが等式化されていないので容認されない。

そこで、(1a~c), (2a~c) を見てみると、統語的には、すべて、adverbial // adverbial という形で等式化されているのに対して、意味的には、それぞれ、異なる。すなわち、(1a, b) の場合、[+time] // [+time], (2a, b) 場合、[+place] // [+place] という形で等式化が見られる。が、(1c), (2c) の場合はどうであろ

うか。一見した限り、(1c) では [+time] // [-time], (2c) では [+place] // [-place] という形で、それぞれ、等式化は見られないように思われる。もしそうならば、(1c), (2c) の場合、統語的には等式化されていても、意味的には等式化されていないということになろう。が、果たしてそうであろうか。

そこで、もう一度、(1c), (2c) を見てみると、それらは、それぞれ、(15a, b) と平行的な意味を有していることがわかる。

(15) a. I saw my father in Grand Central Station *for the last time*.

b. The place I lived for the last time was with an old man. / I *lived* with an old man *for the last time*.

その場合、まず、一つの自然な見方として、(15a) の *for the last time* という adverbial が、*the last time* という nominal な形で文頭で実現し、焦点の部分に *in Grand Central Station* という adverbial が据えられた構文が (1c) (= (16)) であるとする考え方が成立しうるように思われる。(なお、*the last time* という形は nominal でも、それが文頭でテーマの部分を導入機能を果たするとき adverbial なものになる。)

(16) *The last time* I saw my father was in Grand Central Station.

(16) では、一見すると、テーマの部分 ([+time]) と焦点の部分 ([-time]) とが意味的に同定 (identification) されえないのではないかとと思われるが、実際には、「時間」と「場所」をはじめ、「時間」と「方法」、「方法」と「理由」などは、特に口語において、同定の対象として並置されうる。例えば、

(17) a. *Where* I want to start telling is *the day* I left Pencey Prep. —J. D. Salinger, *The Catcher in the Rye*

b. *How* it first happened was *when* he came in to talk after the trial. —J. C. Oates, "A Legacy"

c. *The way* it started being called that was *because* there used to be a dozen or more little shacks and shanties. —E. Caldwell, *Close to Home*

もしそうならば、(16) におけるテーマの部分と焦点の部分との間においても、

意味的な同定は成立しているものとみなして差し支えなからう。

では、次に、(2c)における意味上の等式化についてはどうか。もし、(2c)が、上で見たように(15b)のような文(*The place I lived for the last time was with an old man.*)と意味的な平行性を有するとすれば、(2c)のテーマの部分と焦点の部分との間で、実は、意味的な同定が可能であると考えられる。というのは、場所理論的観点に立てば、*with an old man*という「随伴」概念は「場所」概念として把握されうるからである。その場合、(2c)、(15b)におけるテーマの部分([+place])と焦点の部分([+place])とは、それぞれ、意味的に同定されるとみなしてよい。

以上のことから、(1c)、(2c)のいずれにおいても意味的な等式化は成立しうるものと考えられる。

4. 次に、第1節で見た(1c)、(2c)のテーマの部分と左方転位することが不可能であるという事実を、機能的な観点から見てみよう。

- (18) a. **The last time I saw my father, it was in Grand Central Station.* (= (12c))
- b. **The last place I lived, it was with an old man.* (= (13c))

(1c)、(2c)のような構文は、当該要素が文頭でテーマづけを受けた構文である。その場合、送り手(addresser)はこれから伝えようとするメッセージ(message)の方向づけを行うわけである。そこへ、さらに左方転位を施せば、二重にテーマづけを行うことになる。なぜなら、左方転位という操作は、一般に、送り手が文頭にテーマとしての機能を担わせたいと思う要素を配置させる仕組みだからである。つまり、(18a, b)が、それぞれ、容認不可能であるのは、機能的に見て、不要に二重のテーマづけが行われているからだと考えられる。

事実、二重のテーマづけが適切でないことは、例えば、次のような例によっても指摘される。

- (19) a. *My grandfather built these houses.*

- b. These houses were built by my grandfather.
 c. ??By my grandfather these houses were built. —Halliday, 1967.

(19c) が不自然なのは、(19b) で *these houses* をテーマにする目的で受動文を用いているのに、そのテーマを無効にして、*by my grandfather* を文頭に出してテーマにしているため、受動文の目的が達成されないことになって不自然さが生ずるからである。つまり、(19c) のように (19a) から見て二重にテーマづけが行われた構文は適切でないと言える。

こうした二重のテーマづけは、しかしながら、(12a) (= (20b)) のように、左方転位されたテーマの部分か統語的、意味的に自立可能な場合には容認可能となる。さらに、二重のテーマづけが義務的なのは、(21b), (22b) のように、それぞれ、テーマの部分と焦点の部分との直接的な意味的衝突 (*semantic conflicts*) を回避するために、テーマの部分に左方転位を施す場合である。(その場合、当該部分が統語的、意味的に自立しうることは言うまでもない。) (cf. 田中 (1980))。

- (20) a. *When I saw John was at five o'clock.*
 b. *When I saw John, it was at five o'clock.*
 (21) a. **When he left her that night was with regret.*
 b. *When he left her that night, it was with regret.*
 (22) a. **If my hand trembled was with hope.*
 b. *If my hand trembled, it was with hope.*

こうした機能的な見方に関連して、次に (1c), (2c) の派生について、同様に機能的な観点から見てみることにしよう。

まず、(2c) のような文では、*with an old man* ([+place]) という adverbial を焦点の位置に据えるため、*I lived with an old man for the last time* → *The place I lived for the last time was with an old man* → *The last place I lived was with an old man* というプロセスを経て派生されるという見方は適切でない。というよりは、むしろ、*I lived with an old man for the last time* → *The last place I lived was with an old man* といったプロセスを経て派生

されると想定される。というのは、前者のような二重のテーマづけは、上述のように機能的に見て適切なものと言えないからである。つまり、(2c)のような文は、with an old man ([+place]) という adverbial を焦点の位置に据えるため、文頭で the last place ([+place]) に導かれる文によってテーマづけがなされた構文であると言える。

同様に、(1c) についても、第3節で見たように、それが (15a) のような文と意味的な平行性を有するならば、for the last time という adverbial を the last time という形にして文頭に置き、焦点の部分に in Grand Central Station という adverbial を据えた構文が (1c) であると考えられる。その場合、焦点の部分に in Grand Central Station ([+place]) という adverbial を置こうとするなら、なぜ、無標の (unmarked) *The place I saw my father for the last time was in Grand Central Station* といったテーマづけがなされた構文を取らないのか。また、それほど無標でないにしても、なぜ、*The last place I saw my father was in Grand Central Station* ([+place] // [+place]) のようなテーマづけがなされた構文を取らないのか。

こうした問題は、テーマづけの動機に、次のような二つのケースを措定することによって明らかになるのではないかと思われる。すなわち、ある要素を焦点の位置に据えようとする意図のもとに、送り手がそれに対応する何らかの要素をテーマづけしようとする場合と、(主に強調のため) 何らかの要素をテーマづけたいと思う送り手の意図を優先させる結果、焦点の位置にはそれに対応する要素が配置される場合とである。

(1c) の場合、焦点の部分に in Grand Central Station ([+place]) を置こうとする送り手の意図よりは、むしろ、for the last time を強調して文頭に置きたいと思う送り手の意図のほうが優先するのではないか。というのは、もし、前者が優先するならば、*The place I saw my father for the last time was in Grand Central Station/The last place I saw my father was in Grand Central Station* といった無標のテーマづけがなされるのが通例だからである。(1c) の場

合、そのようにはならず、上述のように、一見すると意味的な同定が行いえないのではないかと思われる構文を取るのは、そうした送り手の意図が働くからではないかと考えられる。

5. 以上、(1c)、(2c) のような構文について、統語的、意味的および機能的観点から若干の考察を行った。その要点をまとめてみると、次のように言えよう。

- (23) a. (1c) と (2c) は、統語的および意味的に見て等式文であるとみなされる。
- b. (1c) と (2c) を機能的観点から比べた場合、前者では焦点の位置にある要素を置こうとする送り手の意図よりは、むしろ、ある要素を強調してテーマづけたいとする送り手の意図のほうが優先する。

いずれにしろ、(1c)、(2c) のような有標のテーマづけがなされた構文の存在は積極的に認められて然るべきものと思われる。

References

- Akmajian, A. (1970), "On deriving cleft sentences from pseudo-cleft sentences", *Linguistic Inquiry* 1 : 149-168.
- Bolinger, D. L. (1972), "A look at equations and cleft sentences", in Firchow, E. S. et al. (eds.), *Studies for Einar Haugen* (The Hague : Mouton), pp. 96-114.
- Emonds, J. E. (1972), "A reformulation of certain syntactic transformations", in Peters, S. (ed.), *Goals of Linguistic Theory* (Englewood Cliffs, N. J. : Prentice-Hall), pp. 21-62.
- Halliday, M. A. K. (1967), "Notes on transitivity and theme in English, part 2", *Journal of Linguistics* 3 : 199-244.
- 田中 実 (1980), 「疑似分裂文 When ... is ... 構文」『英語青年』9月号, pp. 295-296.

——関西学院大学文学部助教授——